

眼疾患による苛立ちを訴える妻と 懸命に介護する夫の在宅生活をどう支えるか

スーパーバイザー

高橋 学（昭和女子大学助教授）

事例提出者

Kさん（居宅介護支援事業所・看護師）

提出理由

長男世帯と同居しているものの、日中は老老介護となるYさん夫婦。ケアマネジャーはYさん（妻）を献身的に介護する夫の疲労が気になっており、夫の求めるデイサービスをケアプランに組み込んだ。当初、Yさんは喜んで通ってくれていたのだが、暑くなるにしたがってデイを休みがちになった。夫は「無理には勧められないし……」と困っている。

Yさんの精神面の問題にもっと早い段階で（できれば初回面接で）気づき、アプローチできていれば、もう少し違う展開になったのではないかと考えている。どのようにアプローチすればよかったのか、振り返ってもよくわからないため、提出させていただいた。

かかわりのきっかけ

Yさんは緑内障と変形性膝関節症のため、歩行が困難になってきており、外出する機会が減った。眼科・整形外科への通院は夫が付き添っている。IADL面でも夫が全面的支援をしている。しかし、夫自身も前立腺肥大などを抱えているため、いつま

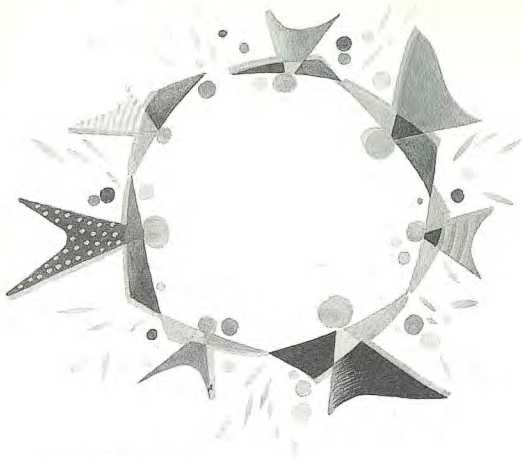
で自分が介護できるかという不安をもっている。そのため、病院の相談室に相談したところ、当事業所を紹介された。

利用者と家族の状況

- 利用者：Yさん（女性・76歳）
- 家族構成：夫（79歳）、長男（49歳）、長男の妻（46歳）、孫（大学生と高校生2人、全員男子）。長女（46歳）は他県へ嫁いでおり、年に数回孫をつれて遊びに来る程度の交流。
- 家族との関係等：長男家族と同居しているが、日中は夫婦のみとなる。

利用者の心身状況

- 要介護度：2
- 主な疾病等：Yさん：神経症（H14頃～）、高血圧・慢性肝炎（発症時不明）・緑内障・変形性膝関節症（発症時不明）、夫：前立腺肥大
- ADL：緑内障による視野狭窄がある。変形性膝関節症のため両膝部が肥大しており、痛みがある。立ち上がりは可、歩行は見守りが必要。入浴はおっくうがり、拒む。食事は声かけをしないと食べる量にムラが出る。排泄は問題なし。
- IADL：着衣は助言をしないと季節に頼着せずに着る。ボタンがうまくかけられない。火の始末ができない。水の出っぱなしがある。金銭管理ができない。
- 精神状況：誰かがそばにいないと落ち着かなくなる（立位・座位を繰り返す）。自分の置き忘れを



全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

人のせいにする。

- 既往歴と経過：緑内障による視野狭窄の不安から「目が悪い、身体が痛い」と同じことを頻繁に繰り返すようになった。主治医によれば「不安を中心とした神経症であり、老人性うつ気質傾向」とのこと。

初回面接の状況

- 日時：平成17年4月15日
- 場所：Yさん宅
- 参加者：Yさん、Yさんの夫

経過と内容

居間にYさんと夫がいる。Yさんは背もたれのあがる椅子に深く腰かけ、色付きのサングラスをかけている。

ケアマネジャーはYさんに、これまでの体調や困っていることを聞いてみた。すると、Yさんは「目がチカチカするの。もう、鬱陶しい！」と興奮気味となる。夫が穏やかに話をして落ち着かせる。Yさんの訴えはその後もしばしばあり、そのつど夫が対応した。

ケアマネジャーの感想

- 夫は常にYさんを見守っており、同じこと（「目がチカチカするの。鬱陶しい！」）を繰り返し話すYさんをそのつど落ち着かせている。夫の介護負担は相当大きいだろうなあ。
- Yさんの1日は、何もすることなく過ぎていくのかしら。
- Yさんに質問をすると、夫は代弁するかのように話を引き取って話し出す。

初回面接の逐語録

• 導入部分

ケアマネジャー（CM）：はじめまして。〇〇病院の相談室から連絡があったと思います。△△居宅介護支援事業所のKと申します。今日はYさんとお話をして、これからのことを一緒に考えていきたいと思っています。

Yさん：……。 (表情は硬く、椅子に深く腰かけている)

夫：よろしくお願いします。

Yさん：目がチカチカするの。もう、鬱陶しい！

夫：それは、目が悪いから仕方ないんだよ (と、穏やかに話される)。

Yさん：う……。もう、目がチカチカする！

夫：かあさん、仕方ないんだよ。だから、今日相談にのってもらおうよ。膝がもともと悪いので長くは歩けないし、目がこんなだから転ぶといけなないので、1日こうしているんですよ。

初回面接のなかで一番印象に残っている場面

- 「目がチカチカするの。鬱陶しい！」というYさんの訴えは何回かあった。そのつど夫は穏やかに対応している。Yさんはそんな夫を「ほんとによくやってくれる。親切な人」と言う。
- 夫は「(Yさんが) 気晴らしができればいいんだが……」と言っていた。

初回面接で把握できたこと

日中老夫婦世帯。夫は会社役員を定年退職。Yさ

んは、編み物、縫い物など細かいことを好む専業主婦であった。目を患ってから、家事一切を夫に委ねている。食事は徒歩3分ほどのところにスーパーがあり、昼食はそこで売っている弁当を購入することが多い。

Yさんは好きなことや家事ができなくなったことへの不安や苛立ちが強いのではないかと（夫はYさんの精神的な部分は語らなかった）。

夫はYさんの気晴らしを考えているが、その実、夫自身も気晴らしやゆっくりしたいという思いがあるのではないだろうか。

立てたプラン

通所介護：1回/週

その後の援助経過

4月24日

デイサービス体験同行

4月26日

デイサービス開始

5月15日

自宅へ訪問。Yさんはサングラスをかけ、椅子に腰かけている。表情は柔らかく「(デイの)お風呂はいいよ。ていねいだし」とおっしゃる。

6月5日

夫から電話。「デイの回数を2回に増やしたい」

6月10日

訪問。Yさん「デイは楽しいよ。気が楽になる」。週2回に増やすことにする。トイレにYさんが立った際、夫に火の始末などYさんの記憶機能について尋ねてみると、「実は1時間前のことも忘れてしまうし、火は使わせないようにしている。水の出っぱなしはしょっちゅうなんだ……。年をとってネジがゆるんでるんだよ……」

6月28日

要介護認定の更新。要介護度が3から2に下がる。

7月8日

訪問。Yさんの表情が明るくなり、食べ物もおいしく感じるとのこと。睡眠も良好。Yさん「今年は運動しているせいもあって、ぜんぜん風邪をひかないのよ」。

<中略>

8月16日

訪問。Yさんはベッドで臥床中。夫曰く「最近は暑さのせいもあり、デイを休むことが多くなった。午前中はだいたいぐずぐずしていることが多く、デイに行きたがらない。行きたくないものは、無理にも行かせられないし……」とのこと。

いま悩んでいること

Yさんがデイに行きたがらない。夫は「無理には行かせられない」と考えている。ケアマネジャーとしてどうすればよいのか悩んでいる。

ケース検討会

依頼文からどんなことをイメージするか

高橋 ありがとうございます。まず始めにKさん

がなぜこの事例を提出されたのか、その思いを共有するために事例の提出理由についてみていきましょ

う。一つは精神面の問題に気づくことができなかつた。精神面のケアをするにはどうしたらよいのか。二つめは、本人がなかなかデイサービスに行ってくれない。このままでは夫がつぶれてしまうのではないか。どうか支援していきたい。この2点でいいですか？

Kさん はい。よろしくお願いします。

高橋 では、この提出理由について質問をお願いします。

発言 一つめの精神面についてですが、事前に精神面に関する情報を得る方法を知りたいということでしょうか。それとも、目の前にいる利用者への精神面のアプローチに関する方法を検討したいということでしょうか。

Kさん 両方です。

発言 Kさんは精神面の問題に気づけなかったとおっしゃっていますが、クライアントからすれば語りたくなかったのではないのでしょうか。

Kさん そうなのかもしれません。もしそうだとすると「語りたくないことがあるんだな」ということも引っかけからなかったもので……。

高橋 どんなところをみていけばキャッチできるかを知りたいんですね。

Kさん そうなんです。

発言 ご主人と本人の会話からは、どんなところに困っていると感じられましたか？

Kさん Yさんの1日は何もすることがなく過ぎているのだろうかとか、日がな「目がチカチカする」というような苦痛の訴えばかりでは、ご主人も大変だろうな、と感じました。

発言 ご本人に、今の生活をどう感じていらっしゃるかはお聞きになりましたか？

Kさん ご本人に話しかけても、ご主人がすぐに代弁されるようにお話をされるので……。



発言 ご主人がつぶれてしまうのではないかと思います理由を、もう少し詳しく聞かせてください。

Kさん ご主人は定年までずっと会社員生活を続けてこられた方なので、世代的に考えても、おそらく現役の間は家事にはほとんどかかわってこなかったのではないかと思います。現在、息子家族と同居していますが、息子夫婦は共働きで孫たちも学校に行っていますので、日中は完全に老夫婦だけになります。そういう状況のなかで、「目がチカチカする！」とYさんから何度も繰り返し訴えられ、そのつどご主人は対応しなければいけません。また、不慣れな家事もご主人が担っておられます。ご主人自身、前立腺肥大などの持病を抱えていますので、これは大変だな、この状況が長く続くとつぶれてしまうのではないかと感じました。

高橋 それはいつ感じたのですか？

Kさん 病院の相談室から最初に依頼文が送られてきたときに、もしかして、と思いました。

高橋 どうしてそのように思ったのでしょうか。

Kさん 自分の家庭に置き換えて考えました。

高橋 置き換えて、というと？

Kさん もし私が同じような状態になったら、ダンナは大変だなんて。あ、なるほど。

高橋 何か気づきましたか？

Kさん はい。私は最初に依頼を受けた時点で、「ご主人は大変だな」という先入観をもって訪問してしまっていたんですね。だから、そのことばかりが目について、ご本人を多方面からアセスメントするという視点がおろそかになってしまった……。

高橋 気づくのが早いですね。依頼文を見たときにどんなことをイメージするのか、ということですよ。Kさんは、ご自分の家庭に置き換えて、「夫が大変だな」とまず感じた。そのこと自体は悪くはないのですが、そのせいで少し視野が狭まってしまったのですね。では、この依頼を受けて、どんな感じ方がありうるか、皆さんのご意見をうかがってみましょうか。皆さんだったら、Kさんと同じ依頼を受けたとき、どんなことを最初にイメージしますか？

発言 私は看護職ではないので、「どんな日常生活を送っているのだろう」とまず思います。先ほどの依頼内容からは、病気がいろいろとあることはわかりましたが、ちょっと生活が見えないな、と感じました。

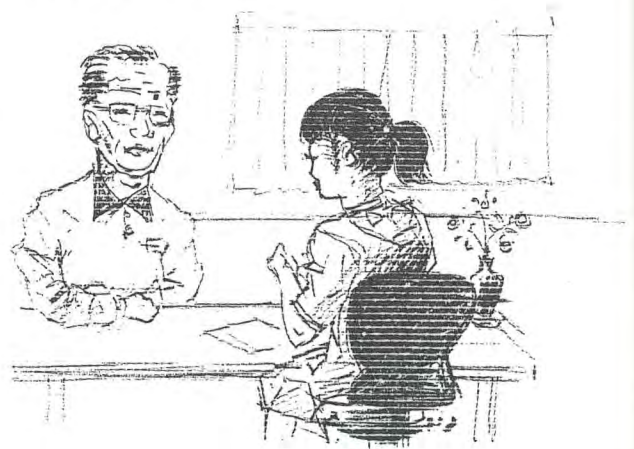
発言 私は、ご主人の介護負担を考えなければいけないな、ということと、病気に関しては、歩行が困難になっている原因は緑内障と膝関節症のどちらが主な要因なんだろう、そんなことが気になると思います。

発言 私も歩行が困難になっているところに引っかかりました。トイレに行けるのかな、どの程度何ができるのかな、と。また、どんな体型をしているのだろう、とも思いました。

発言 私は、ご主人が抱えている不安の中身を聞いてみたいと思いました。介護の負担が大きいのが不

安なのか、自分も病気をもっているの、自分が悪くなったときに奥さんを誰が守ってくれるのかが心配なのか——。ご主人の不安の中身を解明したいな、と思いました。

発言 私は、ご主人がご飯を作ったり、食べさせたり、お掃除をしたり、Yさんをお風呂に入れたりといった、日々の生活や介護をどのようにしているのだろうと思いました。それと、通院のときに困っていることはないか、また福祉用具が要るのではないかと思うので、福祉用具のパンフレットをカバンに入れます（笑）。



高橋 いろいろな見方や感じ方が出てきました。いかがですか、Kさん。

Kさん 同じ依頼文からでも、得られる情報や見なければいけない点はさまざまに引き出せるのだなと思いました。自分のアンテナの鈍さを痛感しました。特に「生活が見えていない」という視点は参考になりました。私自身、看護師が基礎資格なので、疾患名を聞くと、そこから予測される身体面のことが頭の中で反射的に広がってしまうので……。

高橋 Kさんにこの情報をくださった病院の相談室の方は看護職ですか？

Kさん はい、そうです。

高橋 医療職同士だと病名を言うだけで話を通じるので、つい患者さんのこともわかったような気になってしまうんですね。でも、Kさんも気づかれたように、ケアマネは生活にかかわる職種ですから、日常生活の様子とか、病気がもたらす生活への影響とか、夫の不安の中身はどうなっているんだろう、と問題意識をふくらませることが大事ですよ。

Kさん はい。

高橋 また、そういう問題意識をもつことが、今日のKさんの提出理由の一つである「精神面が見えてくる情報を引き出す」ための事前の準備にもなるのです。

Kさん はい、よくわかりました。

本当の「共感」とは

高橋 では次に、どうやって精神面のサポートをしていくか、コミュニケーションのあり方についてみていきましょう。ご質問をどうぞ。

発言 3人のお話し合いは、どんな雰囲気だったのでしょうか。

Kさん Yさんはイライラ、トゲトゲしていて、「目がチカチカする!」としきりにおっしゃり、そのたびにご主人が穏やかになだめる、という雰囲気でした。それで、やっぱりご主人は大変なんだな、と――。

発言 Yさん自身についてはどのようにお感じになりましたか?

Kさん Yさんはもともと縫い物とか細々した作業が好きな方で、ここでもまた自分を重ねてしまったのですが、私もわりと細かい作業が好きなので、目を患ってそういう作業ができなくなってしまったら、不安や苛立ちもあるだろうし、当たりたくもなるだろうなと思いました。

高橋 そう感じたことはお伝えしたのですか?

Kさん いえ、していません。後から言語化すればそう感じたと言えるのですが、そのときは「気の毒に」と思ったくらいでした。

高橋 むしろ、ご主人の大変さに気持ちがいてしまったんですね。

Kさん はい。Yさんは興奮されているので、それ以上刺激をしてもいけませんし、ご主人が代弁するようにお話しして下さったので、それをよしとして「ご主人意向の奥様プラン」を作ってしまった。

発言 Yさんが興奮してまで訴えたかったことというのは、何なのでしょう?

高橋 そうですね。興奮するというのも一つのメッセージの出し方ですからね。

Kさん う〜ん……。

高橋 もちろん、本当のところはこれから深くかわるなかで探っていかなければわかりませんが、先ほどKさんがご自分と重ねて推測された部分に一つのヒントがあるかもしれません。

Kさん ……。

高橋 Yさんは細かいことを好む専業主婦だった。でも、目を患ってからは家事一切を夫に委ねている。この短い情報からでも、Yさんにとって細かいことや家事ってどんな意味があったのだろう、それらができなくなってきたということは、もしかしてYさんにとってアイデンティティや生きる価値のようなものが減ってしまうことなのではないか――。そんな推測ができますよね。

Kさん はい。

高橋 先ほどKさんも細かい仕事が好きだとおっしゃっていましたね。もし自分が同じ状態になったら、どんな気持ちになると思いますか?

Kさん 自分の居場所がなくなってしまったよう

で、いたたまれない。情けない。ダンナに申し訳ない——。

高橋 そうですよ。そして、情けない気持ちや罪悪感というのは、内に向かう場合もありますが、反対に外に向かって攻撃したり、何かのせいにしてという「怒り」という形になって表出されることもありますよね。もしかすると、Yさんの興奮や苛立ちというもの、そうした心理的なメカニズムが働いているのかもしれない。そうやって自分を使ってみると、クライアントの心理を理解しやすいかもしれません。

Kさん わかりやすく解説していただき、ありがとうございます。先生、よろしいですか？

高橋 また気づきましたか。どうぞ。

Kさん 皆さんに検討していただくなかで、私は実はYさんと向き合おうとせず、Yさんから逃げたことに気づきました。ご主人のことが心配だったのはそのとおりなのですが、そこには「Yさんから逃げたい」という気持ちもあったと思います。

高橋 とても大事なことに気づかれましたね。「Yさんから逃げたい」と思ったのはどうしてだと思いますか？

Kさん う～ん……。

高橋 Yさんに「目がチカチカする。鬱陶しい！」と何度も言われると、聞いている側も鬱陶しい気持ちになりませんでしたか？

Kさん う～ん……そこにも問題があったのでしょうか……。

高橋 援助職者も生身の人間ですから、そういう気持ちをもつのも当然なんです。そのこと自体は責められるべきことではありません。ただ、そこで大事なのは、自分のなかに起きてきたそうした陰性感情をどう扱うかです。Yさんのたび重なる訴えを聞けば、誰でも鬱陶しい思いを抱きます。でも、その鬱



陶しさこそ、まさにYさん自身が感じている世界ですよ。

Kさん なるほど——。

高橋 よく研修や書籍で「共感が大事」といわれます。共感というのは、単に「大変ですよ」とか「よくわかります」といった言葉を返すことではありません。いま目の前にいるクライアントの訴えを聞いて、たとえば「鬱陶しい」と思ったとき、でも、その鬱陶しさはクライアント自身が抱えている気持ちのほずだ、と思い、その鬱陶しさを共通の話題にして語り合うとき、本当に共感していることになるのです。また、それがYさんに対する「精神的なサポート」の入り口にもなりますよね。

Kさん 今まで「共感」とか「共有」という言葉は何度も習ってきましたが、表層的に理解していたことがよくわかりました。自分自身がかかわりたくないと思う部分こそ、利用者は一番かかわってほしいのかもしれないですね。

高橋 そうですね。よく精神分析家は「相手から言葉をぶつけられたときは、自分の身体で受けとめる」と言います。受けとめたときに自分の身体的な

かで湧いてくる気持ちが、相手を感じている世界でもあるんですね。

Kさん よくわかりました。

今後の支援について

高橋 では、最後の課題、今後の支援のあり方について考えてみましょう。これからYさんご夫婦を支えていくにあたり、どんな点に着目してかわっていけばいいでしょう。皆さん、アイデアを出してあげてください。

発言 どんなサービスを導入するかを考える前に、まずYさんが一番調子のよいときはどんな状態で、どんなことを好むのかといった情報を得ることも大切なのではないかと思います。

高橋 その情報を把握することで、どんなことが見えてきますか？

発言 Yさんにとってもっとも好ましい生活を送っていただくためには、どんな支援が望ましいかを考える材料になると思います。

高橋 そうですね。一番状態のよいとき、まあまあするとき、ちょっと悪いとき、最悪のときなど、いくつかの段階を聞くのもいいでしょうね。

発言 もう少し詳しく家族関係がわかるとよいのではないかと思います。

高橋 家族関係がわかると、どんなよいことがありますか。

発言 ご主人をはじめ、子どもや孫に対する思い——気遣いや不満など——がわかると、生活上の困りごとなども見えてくると思うのです。

Kさん なるほど、と思うのですが、具体的にはどんな聴き方をすればいいのでしょうか。

発言 そうですね。たとえば、通院の話になったときは「ご主人がお疲れのときは通院はどうなさるのですか？」とか「男のお孫さんが3人もいらっしゃ

ると賑やかでしょうね」とか「若い方がいると、いろいろな情報が入っていいでしょうね」といった感じでしょうか。

Kさん なるほど。勉強になります。

高橋 いかがですか、Kさん。これまでのやりとりで、何かアイデアは浮かんできましたか？

Kさん はい。ご主人としては、やはりデイに行っていたほしいという気持ちがあると思いますが、そのことをYさんに押しつけるのではなく、まずは私がYさんとしっかり向き合い、Yさんの立場に立って、どうして行きたくないと思うようになったのかを理解しなければいけないと思いました。それと、向精神薬を数種類服用されていますので、主治医にデイサービスを利用するのに支障はないかといったことも確認し、総合的に考えていく必要があると思いました。

高橋 まずはYさんときちんと向き合う。そこから出発することの大切さに気づかれました。そこが今日の核でしたね。お医者さんのコンサルテーションを受けるというアイデアもいいと思います。では、最後にKさん、感想をどうぞ。

Kさん 精神面に関する情報を得たり、面接のなかで何かしらの手を打ちたいと思っていたのですが、私が事前にもっていた情報からでも、Yさんの精神面にかかわる事前準備ができたのだということがよくわかりました。また、援助職者は利用者が出てきているサインを見逃してはいけないのだと強く感じました。今日のような機会がなければ、ずっと「わからない、わからない」と同じところをぐるぐる回っていたと思います。その意味で、今日は皆さんにいろいろなご意見や視点をアドバイスいただき、うれしく思っています。明日からは、きちんとYさんに向き合って援助をしていきたいと思っています。本当にありがとうございました。